# 翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十七）

肥留川　嘉子
隅田　三鈴

## 凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十六）」（『京都光華女子大学／京都光華女子大学短期大学部 研究紀要』第五十四号、平成二十八年十二月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「九編上」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり〔一ウ―二オ〕のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは　］で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

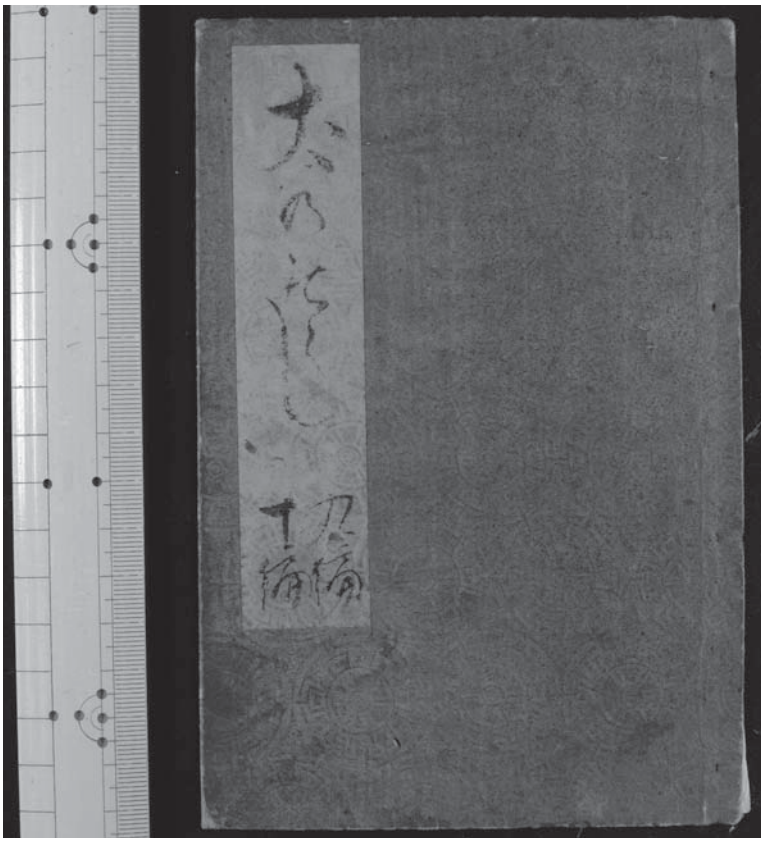
4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のまま）とし、その旨を断わった。まれに原文中に出てくる句点には、〔ママ〕と傍注した）、会話文については「　」を、会話中の会話文には「　」を補った。原文にある「　は『　に改めた（原文の」あるいは　』は、』とした）。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（　）に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（　）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。



**図版1**　九編十編改装表紙

**図版２**　九編 袋（色刷）九編上原表紙（色刷）

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「九編上」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔袋〕

雪／梅／芳譚

犬の／双紙／九編

仙果鈔録／豊國画図

立齋写 廣重

紅英／堂梓

〔原表紙〕

一名／八犬傳 犬の草紙（いぬ／さうし）

九編上

〔原表紙見返し〕

雪梅／芳譚

いぬの／さう／し

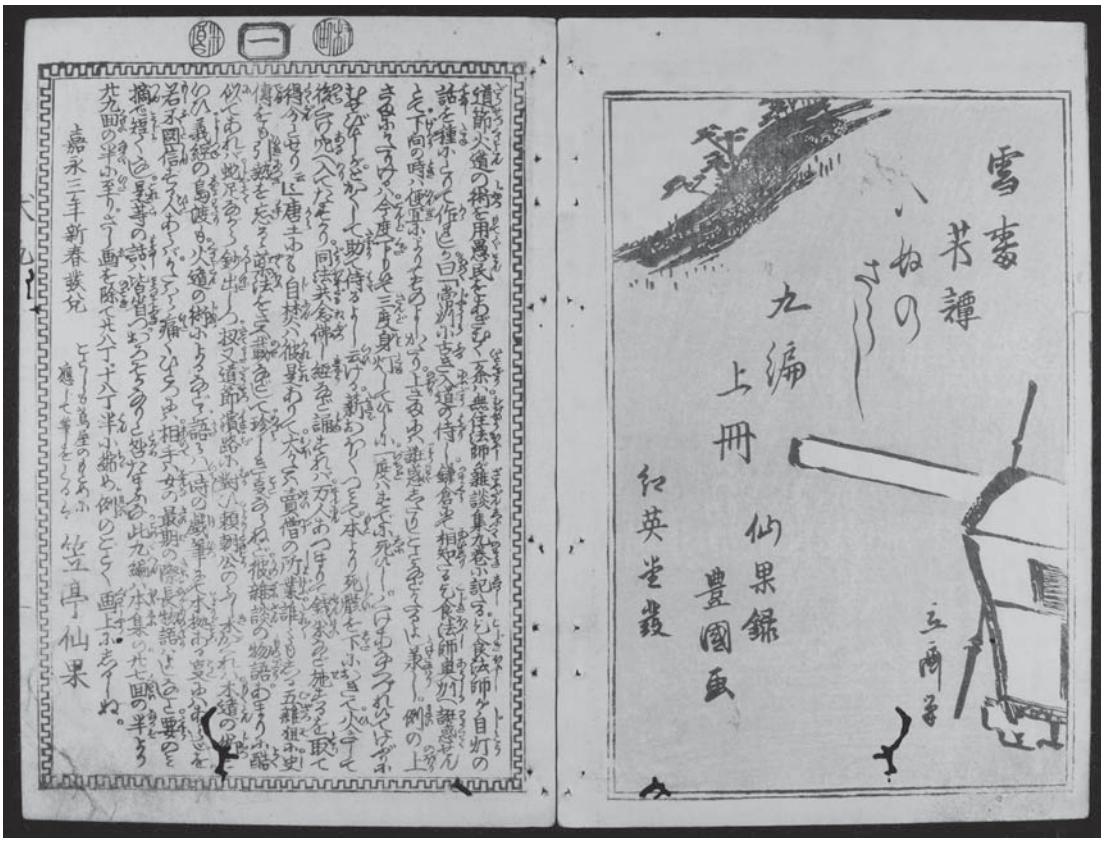
九編／上冊

仙果録／豊國画

立齋筆

紅英堂發

（振り仮名は原文のまま）




**図版３**　原表紙見返し（色刷）一オ

〔一オ〕

一

道節火遁の術を用愚民をあざむく一条は。無住法師が雑談集九巻に記たる。乞食法師が自灯の／話を種にとりて作れしか。曰『常州に古き入道の侍し。鎌倉にて相知たる乞食法師奥州へ誑惑せん／とて。下向の時は便宜によりてそのよしかたり。上さまには誑惑したりしことなどかたるよし承し。例の上／さまにかたりけるは。今度下り候て三度身灯して候しに。一度はすでに死候し。くけあなくづれ候てけぶりに／むせび候しが。とかくして助て侍るよし云ける。薪おほくつみて。本より死骸を下におきて。火さして／後くけ穴へ入てたすかり。同法共念佛し経など誦すれば。万人あつまりて銭米など施するを取て／得分とせり云々』唐土にも自焚は彼是ありて。大かたは賣僧の所業。誰々もしる五雑俎に。史／傳をも引熱を忘るゝ薬法をさへ載などして。珍しき事ならねど。彼雑談の物語。あまりに酷／似てあれば。蛇足ながら鈔出しつ。扨又道節濵路に對ひ。頼朝公のふし木がくれは。木遁の術と／いひ。義経の島渡も。火遁の術によるなど、。語るは一時の戯筆にて。本拠ある事にはあらじを。／若不図信ずる人あらば。かたはら痛くひとつには。相手は女の最期の際。長物語はよしなしと。要のみ／摘で短くなし。是等の話は皆省つ。おろそかなりと咎たまふな。此九編は本集の。廿七回の半より／廿九回の半に至り。さし画を除て廿八丁。十八丁半に縮め。例のごとく画上にしるしぬ。

嘉永三年新春發兌　ことしも蔦屋のもとめに／應じて筆をとるは　笠亭仙果

（振り仮名・句点は原文のまま）

**図版４**　一ウ、二オ

〔一ウ―二オ〕　（振り仮名は原文のまま）

煉馬平左エ門 尉／倍盛 家老／犬山監物貞與
剃髪 後稱道策
綾女、於嘔、兩人ノ／妾 に男子を産／たらん者をもて／正室になさんと／
契約する／ところ。」
口画からあまりぶしつけには候へども、一寸口上申上候。
御くすり／おしろい　白芙蓉　一包／三十六文　同うす／けしやう　あけ
のふじ同断
むるゐ／ながしおしろい　さくら香　一包／廿四文　あくぬき／ゑりおし
ろい　ぱつちり　一袋／四十八文
右當店にて／先年より賣ひろめ／申候。沢山御用被仰付可被下候。

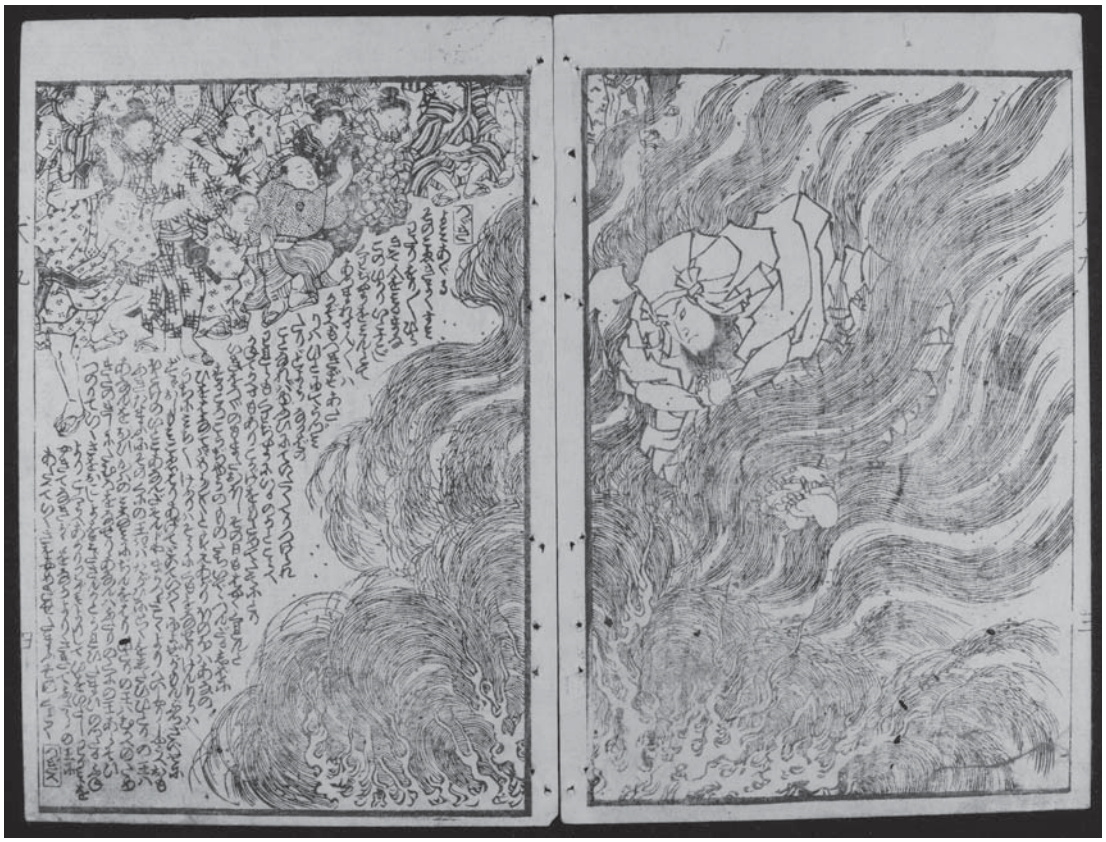
〔二ウ―三オ〕

読み始め／生まれは／何処の／人とも知れず、／近頃東 の／国〻を修
行 し／歩く山伏あり。自 ら／寂 寞道人賢隆／と名乗りぬ。その修法と
言つぱ、／炭を火になし薪 を焼べ、燃ゆる上を踏み／渡り、熾を掴み口に
含むに、更に身／内を焼くことなし。さて世の人の未来をうら／なひ、また
諸〻の病 を祈るに、不思議の／奇特を顕 しければ、大方の人神とうや／
まひ活き仏 とて信仰せり。去年は陸奥／出羽にありしが、今年は下野、下
総に至り、今／この武蔵に移り来て、例の怪しき法をおこ／なひ、数多の布
施を受くと雖 も、美味き物は／もとより、ろく〻に物も食はず、その顔
形／逞 しく髭長く髪黒く、年は猶いと／若げなれど、大峯〔ママ〕葛 城〔ママ〕
阿蘇〔ママ〕霧島〔ママ〕／数多の山に難行 苦行 し、尊 き神より／法を伝へて仙
術 を得たりと言へり。さてこの賢隆は／左 の肩に一つの瘤あり。「我が身
には神仏 ／宿り給へり。この肩の瘤めく物には、天照／御 神と釈迦牟尼
仏 御座します。この故に／斯く膨れたり」と言へり。水無月の始めつ方よ
り／豊島の郡 に杖を留め、物知らぬ／下〻の人を集めて語りけるは、／
「この娑婆世界は火宅 とて、煩悩の」業火常に燃えたり。また塵の世
とも／言ひて、掃き溜めに居るも同じ。日の／照る所 へ出で、みよ。たゞ
塵埃 に／埋まりたり。厭ふべし〻。生 ある者に死なぬは／なし。機縁既

**図版５**　二ウ、三オ

に満つる時は、日の西山に入る／如く、厚き氷も春は溶くると知らで、千歳／を願ふとも百年の命だに難し。我も／早く受けしところの地水火風火宅／を／空くに返し、急いで涅槃の室に入らん。／火を火と思はぬ術も、皆火宅／の内の苦しみなり。その火を以て身を／焼き死なん。これ元亨釈書／に載する戸隠山の長明法／師、また那智山の／応照が火定に／入りし跡に倣／へり。来る六月／十九日申の／下刻日の／入りに至り、／円塚山の／麓におい／て我も火定に入る／べきなり。我が臨終を／見んと思はゞ、一束の柴を／布施して集ふべし」と触れ知らせぬ。／入定とて土に埋まり、終はりを／とるはある習ひ、火定は実に／珍しく尊きことゝ驚き崇め、／「この活き仏の入滅を拝までや●」●あるべき」と／その日を待たぬ／者はなし。／講中などいふ／者は、十五日の頃／よりかの円／塚に土壇を／築き、広さはおよそ／五六間、深さは／一丈余／りに及べる／穴を土壇／の前に掘り、／柴薪」投げ入れ〳〵、／既に用意も／調ひぬ。／斯くてその日になれば、／寂寞道人／賢隆は白／布にて頭を／包み、輪袈裟とかゞ／みを胸に掛け／壇に上り／鈴振り鳴／らし、朝／より暮るゝ／経／高／やかに／つぎへ

○賢隆は／肩瘤／の心にて／付けたる／名なる／べし。



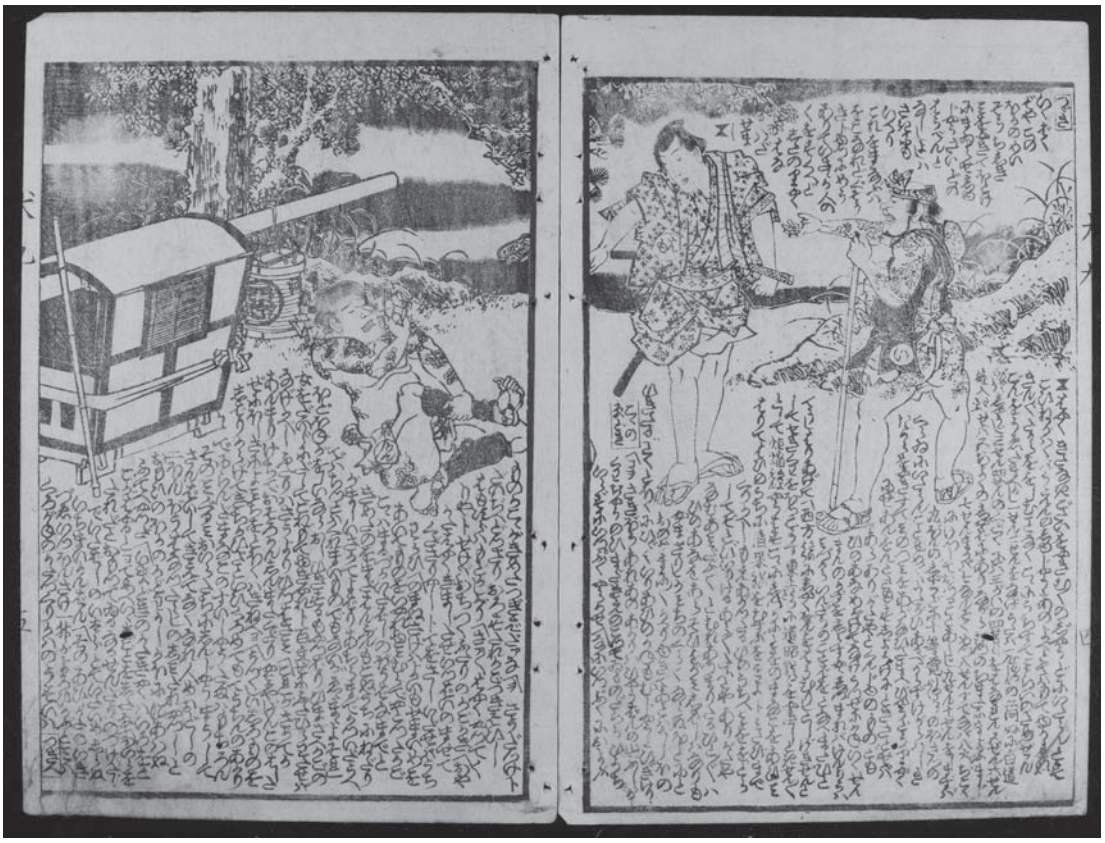
**図版6**　三ウ、四オ

〔三ウ―四オ〕

つゞき／読み上ぐる。／その声清く澄み／渡り、折〳〵開／きて人を見るまな／この光いと凄し。／火定を見んとて／集まれる人〳〵は／数へも尽きず、辺／りは人にて埋み／たり。土用半ばの／ことなれば、夕日にて甚く照りつけられ、／我等も火定に入るのかと、堪へ／かねて帰るもあり。木陰を求めて盾に取り／息を継ぐのもまた多し。その日も早く暮れんと／する頃、講中の者立ち出でゝ積んだる柴に／火を放てば、めら〳〵〳〵と燃え上がり炎は穴の／内に満ち〳〵、煙は空に雲をなせり。賢隆は／数珠押し揉み、声張り上げて説いて曰く「如是我聞、仏在世に／仏の従兄弟阿難陀尊者、摩掲陀国より吠舎釐城へおも／ふき給ふに、その国の王は互ひに徳を慕ひ、一人の王は／阿難を追ひ川の南に陣を張り、一人の王は迎への為／北の岸に屯を為せり。阿難は二人の国の王争ひ／募りて戦を起こし、世を乱さんかと憂ひ給ひ、乗つたる舟／より虚空へ上がり、我が身よりして火を出だし、我が身を／焼きて亡骸を中より裂きて二人の王に／与へて戦を止めさせ給ふ。その功徳 つぎへ

〔四ウ―五オ〕

つゞき／幾許／ぞや。この／他の名／僧知識／身を焼きて仏／に参らせ、衆／生済度の／方便と／為しし由は／前にも／言へり。／これを学ぶは／烏滸なれど、愚僧／奇術に妙／ありて些／か人の／苦を救へど、／自他の利益／はな／はだ／狭／し。／●●早く穢き五体を焼き、無垢の浄土に至らんとす。／希はくば有縁の衆生、彼の世へとては持て行かれぬ／金銀宝を惜しむことなく此処に打ち捨て未来の為、善／根を植ゑ給へかし。一銭二銭を擲たば、一心の二河がに白道／生じ、三銭四銭の功徳には三界の四苦を離れん。五銭六銭／施入せば、五濁の娑婆にありながら六の巷に迷ふまじ。／七銭撒かば七難即滅、八銭捨てなば八大地獄／に決して墮つることあらじ。九銭十銭惜しまずば／九品の浄土に十等覚の菩薩の／位に至らんこと、努〳〵疑ひあるべからず。穢らはしき／宝を焼き捨て、身の罪を贖ひ給へ。平等利益／二世安穏」と、さも殊勝げに説き諭せば、／「あら有り難や」と群集の者共／火の穴目掛けて擲つ銭金、



**図版７**　四ウ、五オ

幾千／万の数を知らず。や、静まれば賢隆は／自ら引導の言葉を唱へ、また一／調子張り上げて『西方に釈尊を葬りし年、撃然と／して石火を発興す。東土に道昭を焼きし時、閃〳〵／として炬焔揚播す。此処、に静かに十の眼を相見／張りて、灰の内に清果を結ぶを看よ」ト三度まで／繰り返し、燃え上がつたる火の内へ身を躍ら／してぞ飛び入りける。「あら〳〵尊や有り難や、／南無阿弥陀仏〳〵」と群れ集まりたる人〴〵は／火の穴を争ひ拝み、暫しは鳴りも／止まざりしが、道の暗くならぬほどにと／己がまに〳〵帰り行きて、後は潮の／引きたる如く遠くに響く入相の鐘も無常と響きけり。

こゝの／絵解き『コラ先棒、あれあの明かりは評判の山伏が／火定の火、まだ消え残つてゐるのだらう。火打ち／要らずに一服やらかせ」『なに一服に及ぶ」ものか。此処が決めた継ぎ場だァな」『ヲ、さうだつけ」ト／大地へどつさり下ろす垂れ駕籠。付き添ひし／鰻次郎はもどかしがり、『さァ〳〵早くやつてく／りや」ト急けば落ち着く二人の駕籠舁き。『親／方、早く来ましたぜ。一杯飲ませて／下さりやし」ト手を差し出だせば、打ち／笑ひ『飲まぬ酒は酔いもせまい。目を／開いてものを言やれ。ゆみ村で雇つた駕籠、／此処は円塚、板橋の棒端までと／決めたのを、まだ半分も来ぬ内に強請り／がましい酒手呼ばり。彼方まで担いだ上／では、ちつとはくれまいものでもないが、ゑゝまゝよ、それ／ほど骨が惜しいなら、押し引きするもやつぱり暇ざへ。駕籠の／女を大事に出して、これ持て行き遣れ」ト百文銭二片渡せば／投げ返し、二人は左右より引つ挟み、『これが酒手か。／あんまりけちでおそろ韓信股くだり、やみや拳固の端／銭欲しさに夜道を遠くは来ねヘョ」『美しい代物を／縛り紮げて、気違ひだと言ひ黒めても提灯の明かり／で睨んだ眼の水晶、玉は勿論／その身包み、己等達に進上申して／三拝して消えてなくなれ。人目脅しの／二本棒、鼻つ垂らしのしみたれ窶しと／思ひの他の拐かし。顔に似合はぬ／太へ奴だ」『今時の敵役は色をと／こが流行るとョ。手前良ゝ仕事をしたな」『己等を／誰だと思つてゐる。中山道の付け出し／で板橋のい太郎とて、痛い目知らぬ／一枚看板」『その相肩の息／杖一本、酒一升が鎧兜、身は／鉄の堅作り、皮の薄いは

つぎへ

**図版８**　五ウ、六オ

〔五ウ―六オ〕

つゞき／顳顬ばかり、／神田生まれ／のかん太とて、／怖いものは／終ぞ知らぬ」／『二人の蜘蛛が／張つた網』／『旨く掛ゝつた／黄金虫、／見逃してなる／ものか。棒組み、／女を担いで／行け」ト、鰻次郎が／胸倉へ取つて／掛ゝるを事／ともせず、／『喧しい／藪蚊共。／耳元に／付く物／強請り、／黄金虫／より玉／虫より●●欲しくば光る／氷の刃／受けてみ／をれ」ト抜き／打ちに浴ぶせ／掛くれば、神／田のかん太／足踏み／固め●●棒押つ取り、かの円／塚の火の光を力／に暫し挑み合ふ。／二人は武芸を少し／も知らねど、命知ら／ずの悪者共、い太郎も／はや傷を負へども勢ひ／進んで滅多打ち、鰻／次郎も刀抜く／術は知れども／手利ゝにあらず。／されども刀は／稀代の名物、／打ち振る度に水気／溢れて枯れ草共に／移りし火も消えて目先／も見え分かず。探り合う／ての闇討ちに、かん太はまた／も左の肩先袈裟に斬ら／れてのたり伏す。その間にい太郎／組み付くを、振り放ちてはたと蹴る。／蹴られて伏すを起こしも立てず、／首をはつしと打ち落とし／一息ほつと継ぐところへ、／追つかけ来るとだのと太郎、／やゝ差し上る月白に／透かして頷き、後ろより／「やァ」と叫んで斬りつくるを／鰻次郎は身を捻り、また二の巻へ

二

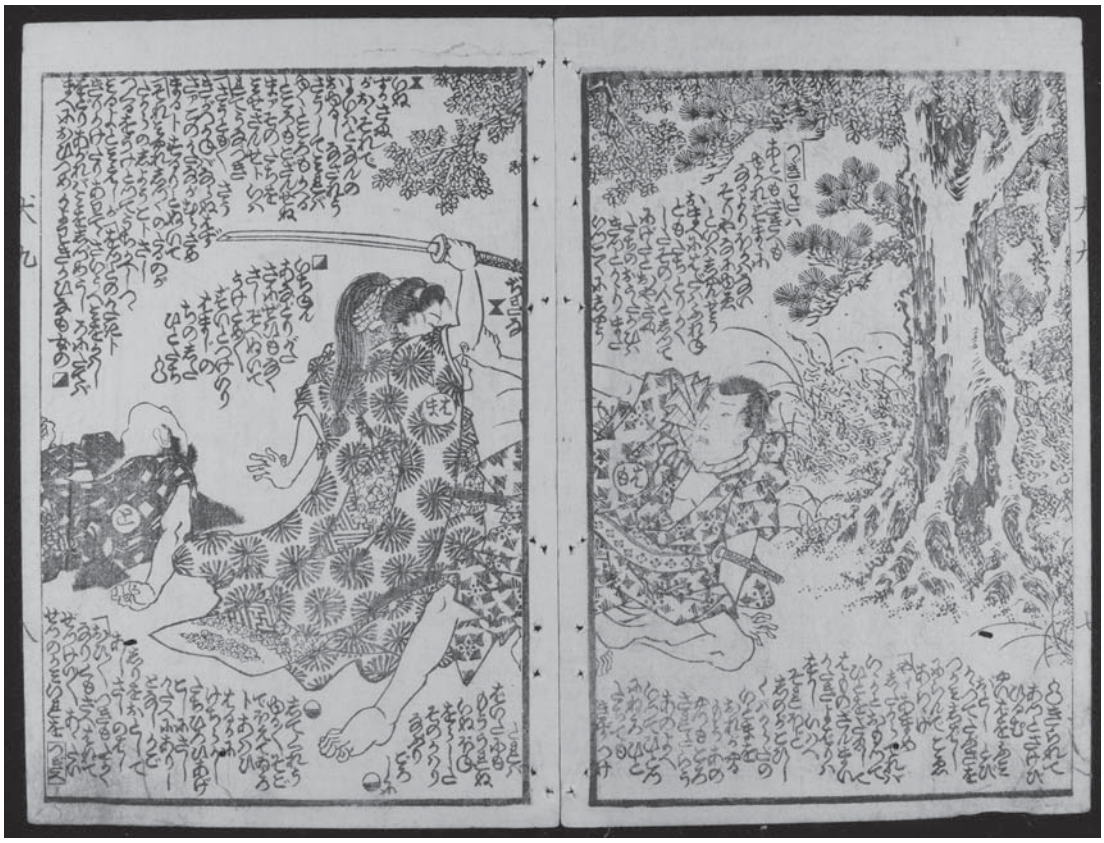
一の巻より／打つ太刀を／払ひ退け／『二人と思へばまた一人、手前も／仲間の追ひ剥ぎか」ト言へば刀を／取り直し『中一日で忘れたのか。／一昨日神宮で舟を漕いだ俺は／とだのと太郎様だ。痩せ浪人の／分際で太い仕事をひろいだな。／臭いもの身知らずとやら、娘を／泥棒しておいて、俺を引剥ぎと／よくぬかした。蛇の道は蛇とやら、／この雲助等は樗蒲／仲間、日暮れにちよいと／見かけた時、「怪しい者を／担いだな。所はゆみ村／曲がつた仕事。さては」と／心の推し当てのちつとも／違はぬこの街道。／非義六旦那に頼／まれて取り返しに来た。／お姐さんに凶事の／ないのが何より仕合はせだが、／彼奴等を殺されては仲間の／敵で見逃されぬ。尋常に／縄かゝるか、やァだとぬかしやァ首に／して、持つて行くなら

**図版９**　六ウ、七オ

西瓜より／ちと珍しい庄屋へ手土産。如何だ〳〵」ト／罵る面つき。始め の二人に輪を掛けて／逞しけれど此方も痴れ者、『艪櫂を力、●●板一／枚下は／地獄の／船頭／商売。／波の上では／鬼でも／あらう、●●一手に／二人を／斬り捨てた／手並みを／見ても／我慢の／角／折れずば／手前も／彼等の／道連れ、／三途の川の／舟でも漕ぎや／れ」ト［つぎへ］

〔六ウ―七オ〕

［つゞき］また閃かすする／どき太刀風。「ゑゝ喧しい」／と打ち合ふ鍔音、谺に／響きて物凄し。鱧次郎は／再びの戦ひに腕／弱り、既に浅傷を／負ひければ、態と敵／はぬ風情して隙を／見て駆け出だせば、と太郎／いよ〳〵勢ひ加ゝり／「汚し、返せ」と追ひ／掛くる。此方は間を／見計らひ、手早く小石を／掴むと見えしが、礫に打た／れてと太郎は眉間を破られ／思はず叫び、眼眩んで／仰向けに倒るゝところを／鱧次郎、走り掛ゝつて胸／板を踏み付け〳〵踏み据ゑて／ぐつさと土に刺し通せば、／と太郎手足を踏ん張り返り／脆くも息は絶え果てけり。／鱧次郎は塵打ち払ひ、暫し／疲れを休めしが、刃を見るに／血潮に染まず洗ひ上げたる／如くにて、猶も滴の湧き／出づるに見蕩れてにつこと打ち笑ひ、／「さて稀代なる刀の奇特、忝／なし」と鞘に収め、腕の／手傷を手拭ひにて縛りて」衣紋掻い繕ひ、「月は／出たが曇つた所為か、暗い〳〵」と／穴の端、残れる柴を／投げ入るればまた燃え／上がり、風につれ／此処彼処の枯れ／草に移れる／野火にて／明るく／なりぬ。／『破魔児〳〵。／これ、破魔児。／三人までも／殺生／したも、皆／これ君への／心中だ」ト／駕籠より引き出し／縛めの抱へ／の帯を緩むれば、／手足は儘になり／ながら怖さも怖し、／さめ〴〵と泣く顔／身を寄せ差し覗き／『嗚呼危ないこと〳〵。／命に代へてもこれほどに／慕ふ俺をば袖にして／これ、つれないとは此方のこと。／篠児が事を思うても、もう／今頃は縛り首、とても●●忠実では帰られぬ。／をゝ驚きは／尤も〳〵。／諦めのつくその／為に掻い摘んで／話しておく」ト／「神宮川にて非義六が／篠児を水へ引き入れし／その時予ての頼み／故、刀は手早く／掏り替へしが、思へば／思へば可惜もの。／彼等に遣るは惜し／ければ、三方●●替へしてこの／通り我が物に／した



**図版 10**　七ウ、八オ

りしが、都へ／持ち行き室町／御所へ参らせ／なば、立派の／武士に取り立て／られんは定の／もの。立身／出世は今の／間」と我が身勝手を／言ひ並べ、木に／餅の生る物／語。「その時／其方は奥様と／多くの人に／傅かせん。／合点がいたら／此処は道中、／またも追つ手の／来ぬ間に早く、／さァ手を引かうか●」●負んぶを／せうか、／如何ぢゃ〳〵」／ト猫撫で／声。／破魔児は／悔しさ／嫌らしさ、／突き転かさん／と思ひしが、／初めて／聞いたる人〴〵／の恐ろしき／巧みの段〳〵、／夫の身の上／如何ならん。命は／此処に捨つるとも／女の一念、／あの太刀を取り／返して夫の／手に渡さんもの／をと心を／鎮め、／涙／飲み込み／息を／吐き、／『手籠めの／縄目も」私をば／思うての／こと、思へば、／恨みは／恨み／情けは／情け。／思ふ／夫に／見捨てられ／思はぬ／人に／誘はれて／斯くなり／行くも／皆／縁尽。／まこと／お前が／むら／さめの／太刀を／持つて／居やしやん／すれば／つぎへ

〔七ウ―八オ〕

つゞき　私は／後へも前へも／行かれず、儘に／なるより他はない。／そりや何故／と言はしやんせう。／お前に肌は触れね／ども、太刀取り隠／したその人と知つて／逃げたと親様／達のお疑ひは／きつと掛ゝり、また／一刻に正」直な／●●／犬／須賀様／が、「おゝそれで／良いは」と何の／お許しなされう。／さうしてみれば／行く所も帰る／所もござんせぬ。／まァその太刀を／見せさんせ」ト言は／れて頷き、／『さうとも〳〵。さう／気が付かねばならぬはず。／さァこの刀が村雨／丸」トするりと抜いて／『それ見やれ、滴の垂るのが／宝の証拠」ト差し／つくるを受け取つて、打ち返しつゝ、／見るよと見えしが、『夫の敵」ト／斬り掛けたり。慌て、左右へ身を躱し／躍り上がれば身を沈め、後ろに立てば／前に追ひ詰め、か弱き腕も女の●●／一念、／侮り難／さに是非もなく／差添抜いて／受け止め〳〵、／ずいと付け入り／破魔児の／乳の下／一太刀／●」●斬られて／「あつ」と叫び、／怯む／刃を踏み／落とし、飛び／掛ゝつて／髻を／摑み、暫し／睨んで声／荒ゝげ／『やィあまめ、／下から出れば／い、かと思つて／人を騙して／刃物三昧。／敵呼ばりは／可笑しいはへ。

**図版 11**　八ウ、九オ

／それほど／篠児が恋し／くば、体の／暇を／俺がやる。／もうあの／奴も殺／されたらう。／彼の世へ／行つて一つ／に寝ろ。一／太刀でも／傷付け」たれば／売女にも／もう売れぬ。／犬骨／折らした／その代はり、／嬲り／殺／しに／●」●／してくれう。／ゆる〳〵そ〔ママ〕ご／で吠えて居ろ」／ト間／遥かに／蹴散らかし／太刀拾ひ上げ／腰に差し、／傍にありし／戸無駕籠／尻を落として／足差し伸ばし／『追ひ〳〵月も高く／なり、雲さへ晴れて／絶景〳〵。嗚呼大／切の紙入れを［つぎへ］

〔八ウ―九オ〕

［つゞき］幾度も〳〵騒いだ内に／落としたさうで、この木の根に。幸ひ／糊にも汚れなんだ」ト拾ひ／寄せて毛抜きを取り出し、／有るか無きかの下髭を／抜き〳〵休らひ居たりけり。／破魔児は深傷に絶え〴〵の／息吐きあへず身を悶へ、／『人でなしの鰻次郎。／大事の夫に／偽物を渡して／やつたは手を出して／殺すも同じ／極悪人。その／上私を／拐かし、殺すは／鬼か蛇かいのう。／まァ今頃は／犬須賀様、何処に／如何して居やしやんす。／儂や案じられる〳〵。／子供の時から／女夫ぢやと思うた／ばかりで枕も／取らず、如何に／勝手に悪い／とて仮初め／ならぬ縁／組みを、手前に／定めて」手前に／背き、／まァ／大／それ／た／●●／悪／巧／み。／娘／に／不義を／させう／とする／やし／なひ／親の／慳貪／邪見。／嘆くに／つけても／恋しさの／勝るは実／の二親達。●●煉馬の殿、／身内の御方と聞いた／ばかりで名も知らず、去／年の戦で皆さんが／討死ありしと／世の取り沙汰。大方／お過ぎなされたので／あらうと思へば、／疾く死んで彼の／世でお目に掛、り／たい。とは言ふもの、、／親、夫のお生き／死にも確かに知らず、／人畜生の悪／者、手に掛、つて死ぬる／のが私は悔しい、口／惜しい。ゑ、誰ぞ強い人、／通り掛、つて此奴を殺し／私を助けて許我まで●●どうぞ、連れて／行つてはくれぬことか」／ト、さも苦しげに／蠢くを見遣りて／毛抜きを押し拭ひ、／『急所の深傷ゞ／長談義、驚き／入つて感心〳〵。／親への孝行／夫へ貞節、さも／哀れには聞いたれど／俺が為には何にも／ならぬ。我人に辛／ければ、人また我に／辛しとやら。／刃の錆も／自業自得。／一度は惚れた／このしや

図版 12　九ウ、十オ

面、／嬲り殺しも／かはへさうだ。 つぎへ

〔九ウ―十オ〕

つゞき 執心のか、つた太刀、村雨丸で／一思ひに殺してやらう」トまた抜き／出だし、向かへば破魔児は身を差し寄せ、／『敵の手には掛ゝるとも、夫の刀で／死ぬは本望。さァ〳〵殺しや」ト手を合はせ／「手前も今にこの通り。恨み報いはない／ものか、あるものか思ひ知れ」ト見上ぐる／目元物凄し。「黙つてくた／ばれ、女め」ト胸先突かんと／取り直す刃に先立つ／一つの手裏剣。火定の／穴の辺りより蝗の如く／飛び来りて鰻次郎が左の／乳の下、裏かくばかりぐつさと立つ。／これも急所の痛傷に堪らず、太刀／投げ捨て、踏ん反つたり。この時穴の／辺より現れ出づるは寂寞道人。／火に焼け失せし山伏賢隆、昼の出立ちに／引き替へて南蛮鎖の腹巻きして唐／織りの単衣衣、袖の広きを上に着て／濃き紫の丸紐帯、朱鞘の大小／差し凝らし、大平金の篠籠手に、十王／頭の脛当てして／年は二十歳の内外／ならん、眉秀で眼／清く色白く／唇赤し。／月代の跡／長く伸び、●●煩げ／なりし作り／髭は何処へか／掻い遣り捨てゝ、顎の／辺りいと青し。／実に奇異の／曲者といはねど」著き人品／骨柄、只／者ならじ／と見え／たりけり。／●●賢隆／静かに嘆／息し、彼方／此方と打ち／見遣れば鰻次郎は／息吹き返し、／手裏剣抜き取り／刀を取り上げ、蹌踉めき／ながら斬り掛くるを、二三度／態と駆け悩まし片手／殴りにはたと斬れば、拳の／返りに鰻次郎は翻筋斗／打つて倒れ伏す。賢隆／刀を熟〻眺め『聞ゝしに勝る●』●村雨丸。あれ〳〵水気／立ち上り滴となつて拳／に伝ふ。竜泉／大阿もこれにや／如かん。我が手に／入りしは／日頃の／願／望、／●●成／就／なす／べき／時／至／れり。／忝／なし」と右に／持ち、左に／持ち替へ／余念なし。／○岳藏は篠児に／別れ、鬱〳〵として／楽しまず。殊更」暑さに涼み〳〵／千住川を／渡りし頃は／はやたそ／がれに／及び／しが、／如何に／して／か／ つぎへ

**図版 13**　十ウ、原裏表紙見返し

〔十ウ〕

つゞき／道を／惑ひ洲／鴨の方へは／行きもせで、こまどめ／村の此方へ来つ。／今更戻るも／無益なり。ほんがう坂を／横切りてつぶて川より／帰るべし。偽傷を／作るには月の／出を待つも良しと、／ゆるゝとして●●四ツ頃に／円塚山へ／来りしが、／この有／様を／月影に／早く／見留めて／胸潰れ／驚き／斜め／ならずといへ／ども、端／なく進み／出でんも／如何ならんと／心を落ち／着け、木立の／後ろに／身を潜め、／様子／如何にと／窺ひけり。

仙果鈔録　豊國畫

〔原裏表紙見返し〕

本家實母散　さんぜんさんご／婦人ちのみち／一切の妙やく

中橋／南傳馬町一丁目東側　千葉堂孝輔製

私方実母さん之義　中ばし南でんま町一丁目西がはにて　年來賣弘來り候処店手ぜまに付　此度同所／向東がはへ引うつり申候間　猶相かはらす御用向奉願上候

御免疝積湯　せんしやくつかへによし

せんきの妙薬

御用薬所　信州上田東山堂製

無るい／えりおしろいぱつちり　一包／四十八銅

無るい／ながしおしろいさくら香　一包／廿四銅

大日本國郡輿地全圖（大奉書六枚継）　府郷御江戸繪圖（同断六枚継）

御おしろいせんきの薬　取次所　地本草紙問屋　江戸南傳馬町一丁目　蔦屋吉藏

**捺印**

〔一オ〕

**図版 14**　九編上原裏表紙、九編下原表紙

衣／笠
濱

**登場人物一覧（九編上）**

次に『雪梅芳譚 犬の草紙』九編上の登場人物名をかかげ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【　】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

犬須賀篠児戍孝【犬塚信乃戍孝】
犬須賀磐作一戍【犬塚番作一戍】の子。磐作の死後、伯母瓶ざゝと伯母婿非義六夫婦に養われる。亡父から託された亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を、非義六の刀とすり替えられたことに気づかないまま、持氏の子成氏【成氏】に献上するために許我【許我】へと旅立った。会話にのみ登場。

岳藏【額藏】
非義六の下男。篠児と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪いふりをしている。篠児が許我へ旅立つ折、非義六夫婦に篠児を殺すよう言われて旅に同行したが、途中で篠児と計り、栗橋【栗橋】の宿屋で篠児と別れ、謀殺に失敗した体で大須賀村【大塚村】に一人戻る。しかし、途中道に迷い、図らずも鰻次郎が破魔児を殺害するところを目撃する。

大須賀非義六【大塚蟇六】
大須賀村の村長。瓶ざゝの入り婿。磐作の死後、篠児を引き取り養育していた。篠児が許我へと旅立った翌日、養女の破魔児とひがみ虬六【簸上宮六】との婚礼の準備をしている最中、破魔児と鰻次郎の駆け落ちを知り、家中の召使い達に破魔児を連れ戻すように命じて送り出した。会話にのみ登場。

瓶ざゝ【亀篠】

篠児の父磐作の異腹の姉で、非義六を婿に迎えた。篠児の旅に岳藏を同行させ、途中で篠児を殺すようにと、亡父大須賀正作参戌【大塚匠作三戌】の脇差を渡した。会話にのみ登場。

青地鱧次郎【網乾左母二郎】

大須賀村に住む浪人。瓶ざゝに、破魔児の婿にする代わりに村雨丸を非義六の刀とすり替えるように唆され、これに協力するが、実は更に密かに村雨丸を自分の刀とすり替えて盗み取っていた。虬六と破魔児との婚礼を知り、自分を破魔児の婿にすると言った瓶ざゝの言葉が嘘だったと気づいて、腹いせに破魔児を無理矢理連れ去った。

破魔児【濱路】

許婚の篠児が許我へ旅立った翌日、突然自分が虬六と婚礼させられることを知り、篠児への思いから首を括ろうとしたところを、鱧次郎に阻止され、連れ去られてしまう。そして鱧次郎の口から村雨丸のすり替えを知らされ、刀を取り返そうと鱧次郎に斬りかかるが、逆に斬り伏せられる。

とだのど太郎【土田の土太郎】

神宮川【神宮河】の船頭。破魔児を連れ戻すようにと非義六に頼まれ、鱧次郎を追いかけ円塚【円塚】にて追いつき、破魔児を取り返そうと鱧次郎に斬りかかるが刺し殺される。

板橋のい太郎【板の井太郎】
神田のかん太【相肩の加太郎】

両人とも破魔児を連れ去った鱧次郎が、ゆみ村【由美村】で雇った駕籠舁き。円塚で鱧次郎を殺し金品などを奪おうとしたが、逆に返り討ちに遭う。

寂寞道人賢隆【寂莫道人肩柳】

二十歳ほどの山伏。円塚で火定を行うが実は生きており、瀕死の破魔児にとどめを刺そうとした鱧次郎を倒して村雨丸を手に入れる。

犬山監物貞與【犬山監物貞與】

煉馬平左エ門尉倍盛【煉馬平左衛門尉倍盛】の家老。剃髪後は道策【道策】と名乗る。挿絵にのみ登場。

綾女【黒白】
於呸【阿是非】

両人とも貞與の妾。挿絵にのみ登場。